



TITLE:

日本におけるヒトiPS細胞研究に伴
う倫理的諸問題の研究(
Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

澤井, 努

CITATION:

澤井, 努. 日本におけるヒトiPS細胞研究に伴う倫理的諸問題の研究. 京都大学, 2016, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2016-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19804>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	澤井 努
論文題目	日本におけるヒトiPS細胞研究に伴う倫理的諸問題の研究		
(論文内容の要旨)			
<p>2007年に、京都大学の山中伸弥らがヒトiPS細胞の樹立に成功して以来、ヒトiPS細胞研究は、ヒトES細胞研究が抱える「倫理的問題」を解決したという前提のもとに推し進められてきた。本論文は、日本が従来とってきたiPS細胞研究への姿勢を振り返り、同研究に伴う倫理的問題を批判的に検討し、総合的に議論したものである。本論文は6章及び結論から成り立っている。</p> <p>第1章では、ヒトiPS細胞研究の前提となっている技術的な背景を描いた上で、国内で議論されてきたヒトiPS細胞研究に関する倫理的問題を紹介している。その結果、ヒトiPS細胞研究が重要な倫理的問題を抱えているにも関わらず、国内の議論が蓄積されていない点が明らかになった。</p> <p>その問題を解決するために、まず第2章では、ヒトiPS細胞研究の道徳的共犯性をめぐる問題、そして第3章では、ヒトiPS細胞の道徳的地位をめぐる問題を取り上げている。第2章と第3章では、ヒト胚の破壊に対して倫理的懸念を示し、ヒトES細胞研究に厳格な規制を敷くような国では、ヒトiPS細胞研究が依然として倫理的な問題となっていることを明らかにした。</p> <p>第2章では、ヒト胚の破壊を伴うヒトES細胞研究が倫理的な問題ならば、そのES細胞研究を助長したり、その恩恵を受けたりするヒトiPS細胞研究に対しても、相応の配慮が必要であるという点を強調している。</p> <p>第3章では、日本がヒト胚の道徳的地位の潜在性を認めるのであれば、ヒトiPS細胞に対しても潜在的な地位を認め、一般的なヒト由来試料以上に、特別な配慮や規制が必要であるという点を強調している。</p> <p>第4章と第5章は、欧米におけるヒトiPS細胞研究の倫理的議論を網羅し、論点の整理と批判的検討を行っている。第4章では、動物性集合胚の研究に対しては、自然さをめぐる問題、道徳的混乱をめぐる問題、人間の尊厳をめぐる問題、道徳的地位をめぐる問題、研究倫理をめぐる問題を紹介している。</p> <p>また第5章では、生殖細胞の研究に対しては、遺伝的つながりをめぐる問題、安全性・リスクをめぐる問題、不妊治療をめぐる問題、生命の選別をめぐる問題、費用コストをめぐる問題を整理している。</p>			

申請者は、いずれの問題も臨床に応用されて初めて倫理的問題が生じるものである
ので、予防措置を取れば回避できるという。即ち、基礎研究と臨床応用を明確に分け、
基礎研究を段階的に許容しても、臨床応用を厳しく禁止すべきことを唱えている。

第6章では、iPS細胞研究の優先順位について論じている。再生医療や難病研究の
課題と展望を述べ、日本のヒトiPS細胞研究政策審議会等の議事録や報告書などを批
判的に検討している。そして、申請者は国際比較の観点から、再生医療や難病研究以
上に、創薬研究に集中することを勧めて、ステークホルダーの声を反映する公平かつ
透明な決定過程を期待している。

総括では、日本には無かった国民的合意形成から生まれる政策立案への期待を示し
ている。なお、文献研究の限界や、臨床におけるインフォームド・コンセント、匿名
化、偶発的所見などの問題を除外している限界も認めている。そして本論文は慎重な
態度を示しているにもかかわらず、最後にはiPS細胞の基礎研究や臨床応用の迅速な
実現を期待していると結論付けている。

(論文審査の結果の要旨)

2007年、山中らがヒトiPS細胞の作製に成功して以来、日本はヒトiPS細胞研究に多額の国費を投入してきた結果、同研究は積極的に進んでいる。科学的発展という一側面だけが称揚される一方で、国内でヒトiPS細胞研究の倫理的問題が十分に議論されているとは言えない。今後、ヒトiPS細胞研究を発展させる上でも倫理研究は不可欠と言えよう。倫理は科学の発展を阻害するとして非難されるが、本論文の目指す倫理は、許容される研究と許容されない研究を分けて、許容されない場合にはその根拠を明確化するという交通整理の役割を果たすものである。本論文は、哲学・倫理学に留まらず、日本のヒトiPS細胞研究を進めていく上での実践的な課題へと考察を進めており、今後の審議会の参照になる基礎的な資料としても存在意義は大きい。

本論文は、まず、国内では議論の深まりが見られない、道徳的共犯性と道徳的地位の問題に焦点を当てている。申請者の主張は、ヒトiPS細胞研究それ自体を無批判に支持するのではなく、ヒトES細胞研究と倫理的一貫性のとれた議論を展開する必要性を説くものである。この研究態度および方法は、英米圏の分析哲学的な倫理に関する議論に親和性を持つものである。実際に、申請者が取り組んできたヒトiPS細胞の道徳的地位に関する論考が、国際誌にも掲載され高い評価を受けていることは、客観的な指標と言えよう。また、道徳的共犯性や道徳的地位をめぐり一貫性のある洞察は、日本におけるヒトiPS細胞研究の倫理的基盤をより強固にし、対外的にも日本独自の視点を説得的に示し得るという意味で貴重な成果と言えよう。

本論文では、ヒトiPS細胞研究の倫理的問題として、しばしば指摘される動物性集合胚の研究、また生殖細胞の研究に関して、国内の不十分な議論を克服するために、英語圏における膨大な文献の系統的な分析（システマティック・レビュー）を実施し、網羅的に論点の整理を行っている。この研究手法を通して申請者は、倫理的問題として提起されるものには、研究それ自体を根本的に批判するものと、研究のある段階を部分的に批判するものがあるとしている。どの批判がどの段階に対してなされているのかを見極めた上で、先行研究における実践的な課題を検討している。主に欧米で行われている倫理問題に関する議論を通して、いかなる倫理的懸念が生じているのかを踏まえて、日本独自の倫理的基準から、いかに研究が進められるべきかを明示しようとしている点で、本論文は労作と言えよう。

本論文の独創性は、欧米で既に提出されている論点を、日本において、いかに検討すべきかを論じている点にある。中でも、ヒトiPS細胞研究における優先順位の設定の議論は特筆に値する。多額の国費がiPS細胞研究に投入されてきたにも拘わらず、研究がいかなる優先順位で進められ、その倫理的根拠は何であるのかに

関しては明らかになっていなかった。本論文は日本のヒトiPS細胞研究に採用されてきた原則や基準を明らかにしているばかりか、今後、いかに優先順位をつけるべきかを示唆している。ヒトiPS細胞研究に関する優先順位づけの議論は、国内外を問わず、当該領域で見過ごされてきた倫理的問題の一つであり、本論文の大きな意義と言えよう。

以上のように、本論文は、十分に検討されてこなかったヒトiPS細胞研究に伴う倫理的問題の検討を前進させるものとして高く評価することができる。他方、議論を道徳的共犯性、道徳的地位、動物性集合胚、生殖細胞、優先順位の設定に限定しているため、その他の問題を検討しきれていないなど、課題も残っている。

なお、iPS細胞研究に関しては、申請者は慎重なスタンスを示している。倫理学者がiPS細胞研究にブレーキをかけることにより、どれくらいの患者にどれくらいの不利益がもたらされるのか、また国がどれくらいの国際的競争力を失うのかについては、考慮が十分に及んでいない処に問題が多少生じ兼ねない。今後、申請者による研究の進展によって、これらの課題が克服されれば、日本の幹細胞研究の倫理的基盤の強化につながるであろう。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成28年1月7日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規定第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。